

ヤマトシジミ漁場利用実態調査

(宍道湖・中海水産振興事業)

安木 茂

1. 研究目的

宍道湖のヤマトシジミに関する調査研究において、資源量把握に関しては採泥器を用いたサンプリングにより定量化することが可能となった。一方、シジミ漁業の操業実態については、標本船調査等が実施されてきたものの¹⁾、大まかな漁場位置や漁獲量といった情報については入手することが可能であったが、水深、底質、水質、気象、シジミ生息状況などの要因とあわせて細かな検証をすることは出来なかった。

さらに、調査船調査による宍道湖全体の資源量調査結果と、実際に漁業者が操業して感じるシジミの獲れ具合が一致しないことがしばしばあった。このことは、狭い範囲でのシジミの分布状況や操業実態が詳しく調査されなかったことが最大の要因であった。

本研究では、調査船に搭載したレーダーによりシジミ船の操業位置情報を細かく収集し、水深、底質、水質、気象条件などの環境要因とを複合的に検証し、漁場形成要因を明らかにするとともに、未利用漁場のあぶり出しを行うことを目的とした。

2. 研究方法

調査は、毎月1~2回調査船「ごず：8.5トン」によりシジミ操業開始時刻に合わせて出港し、レーダー（FURUNO社 NAVnet）を稼働させながら宍道湖を一周し、漁場ごとにレーダーの映像（図1）をカラープロッターに保存し、持ち帰った映像データを画像処理ソフト「MapInfo Professional：MapInfo社」を用いて宍道湖の白地図データに重ね合わせ、調査日ごとの操業位置データを作成した。

調査は平成17年4月14日、5月12日、5月30日、6月21日、7月21日、9月15日、10月11日、11月10日、12月27日、平成18年1月24日、2月23日、3月16日の計12回調査を実施した。

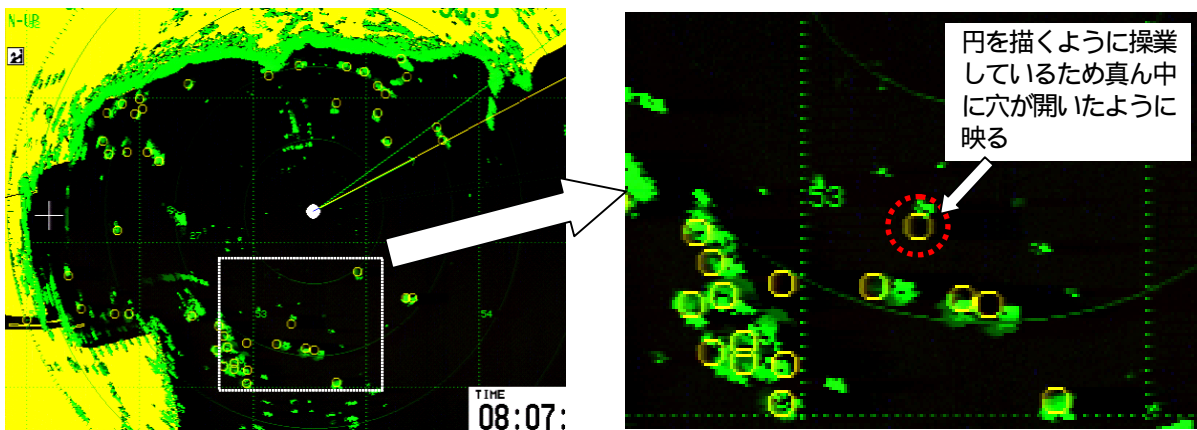


図1 実際のレーダーの映像

3. 研究結果と考察

調査回次毎のシジミ漁船の操業位置を図2～図5に示す。

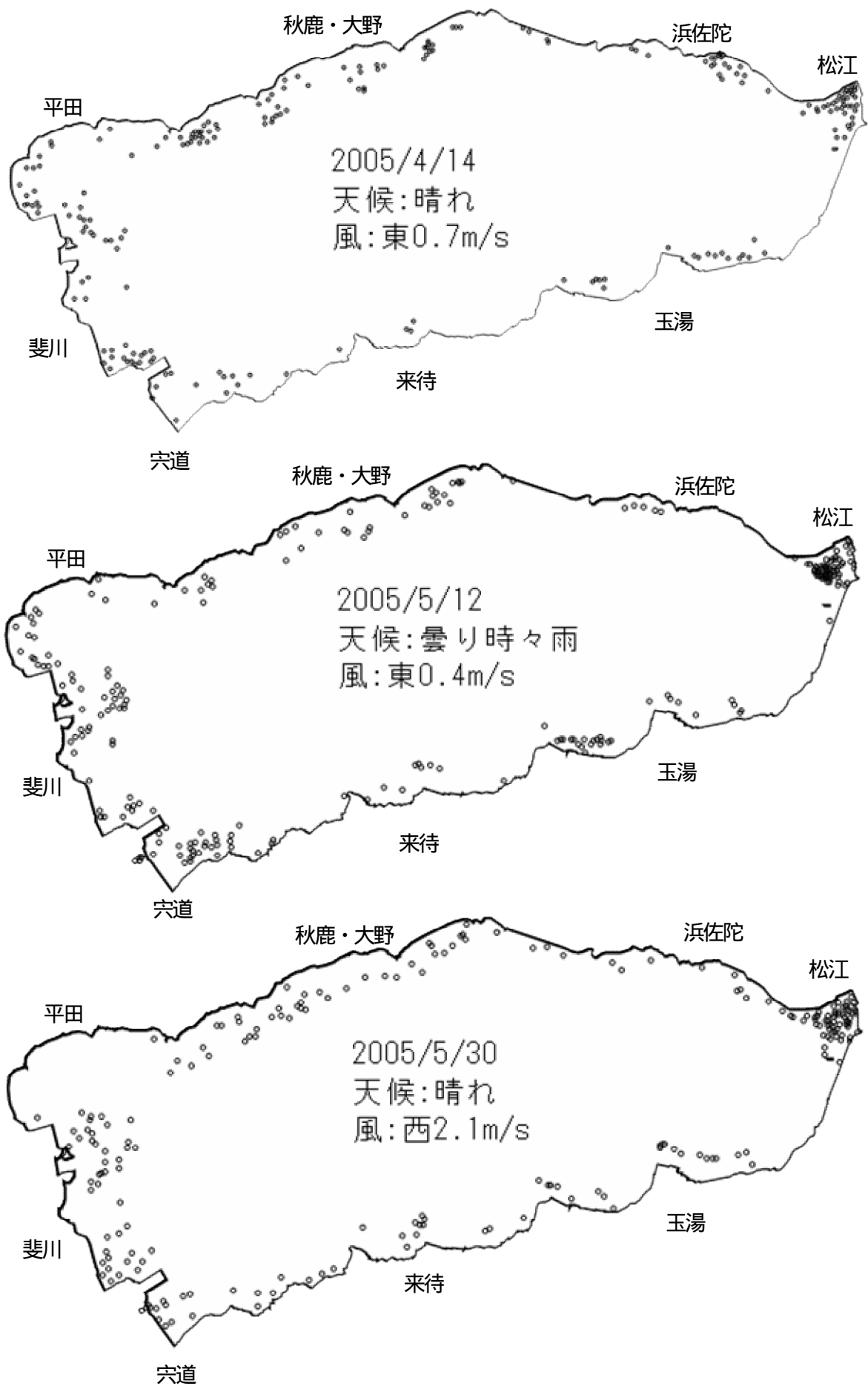


図2 シジミ漁船の操業位置 (2005年4月~5月)

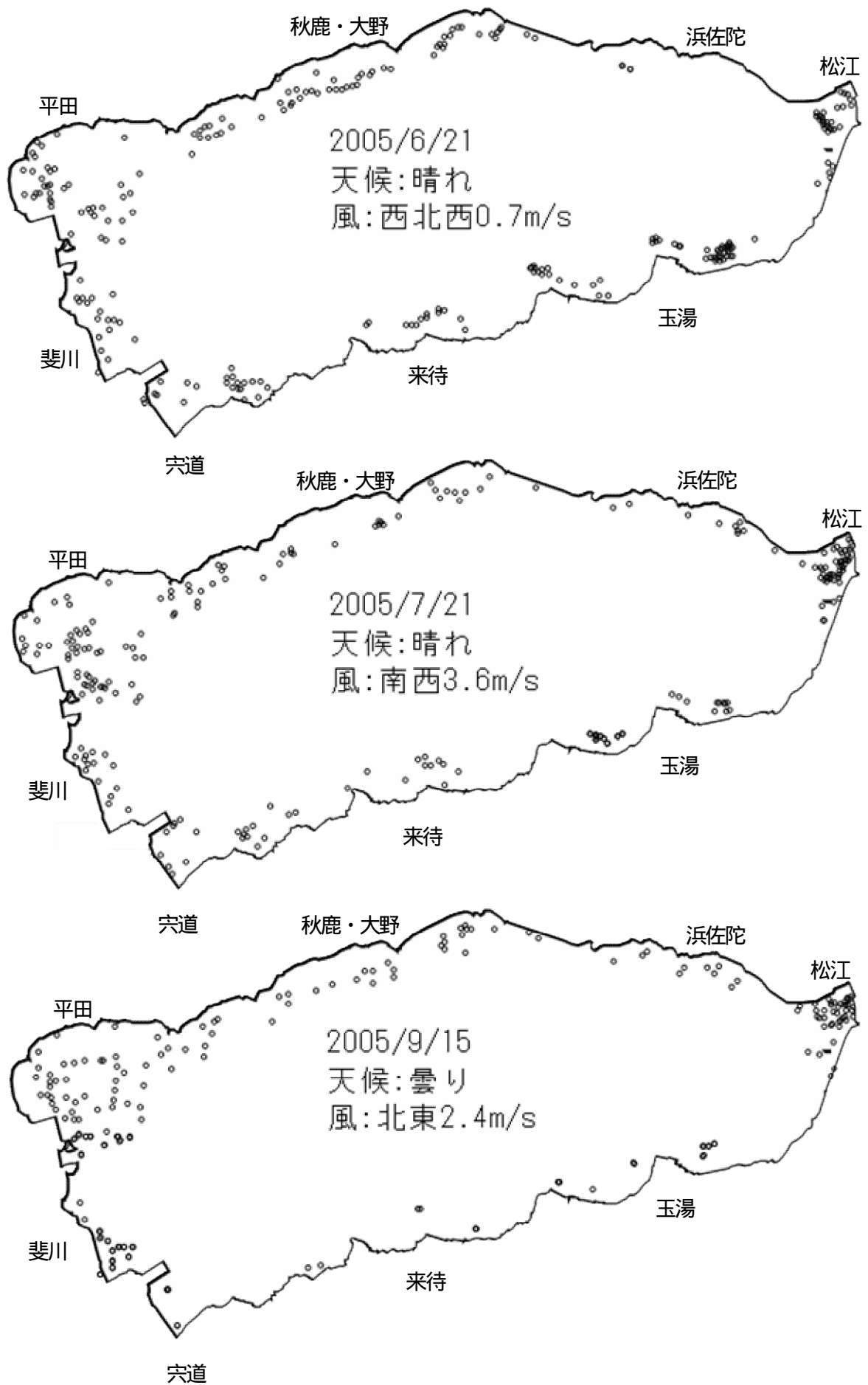


図3 シジミ漁船の操業位置(2005年6月~9月)

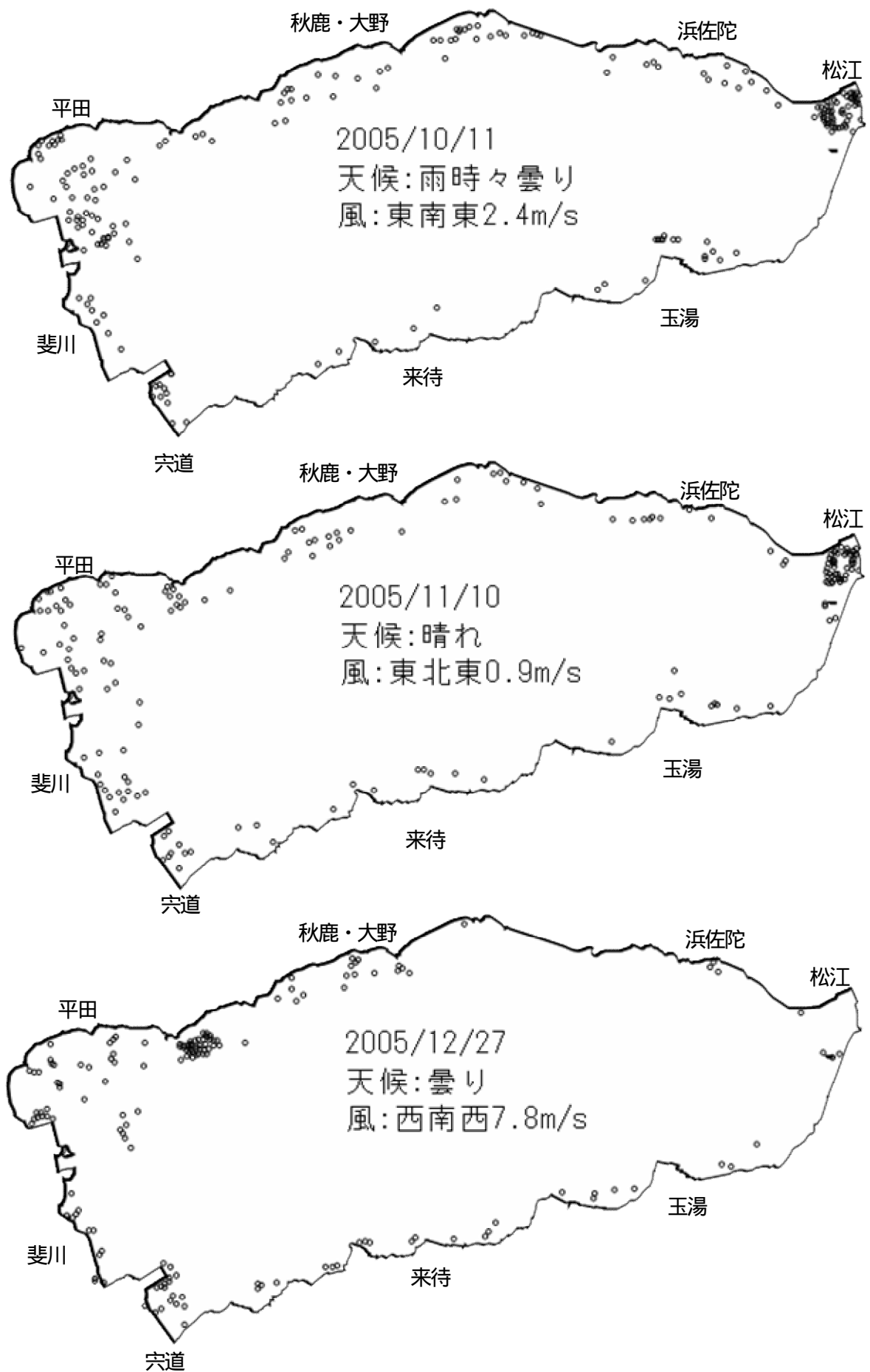


図4 シジミ漁船の操業位置(2005年10月~12月)

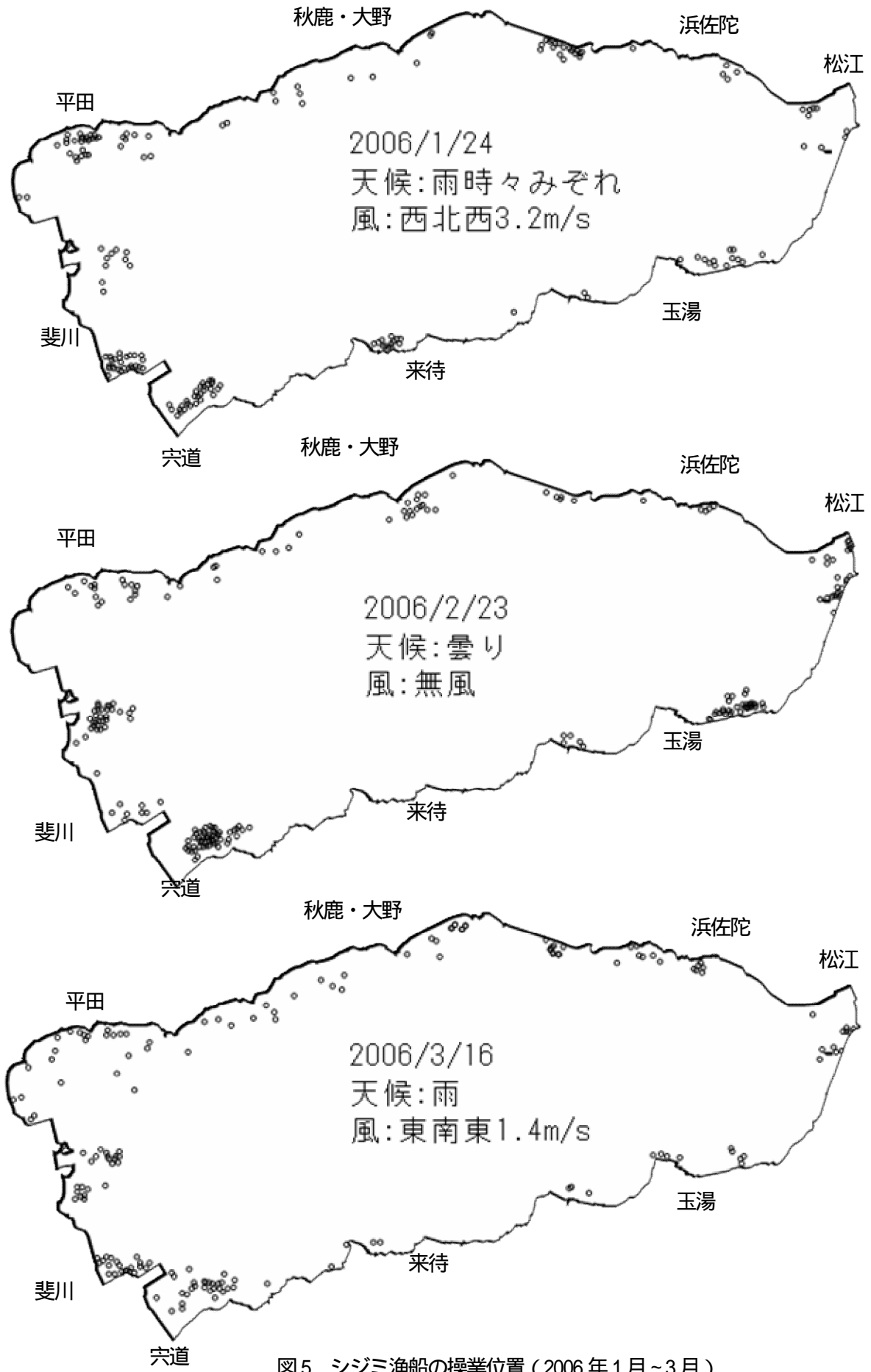


図5 シジミ漁船の操業位置 (2006年1月~3月)

シジミ漁場は、ほとんどの地区で沿岸部に形成されていたが、北西岸の平田地区では沖合い(水深4m)まで漁場が広がっていた。季節的变化を見ると、4月14日から11月10日までは平田、斐川、松江、玉湯、宍道、秋鹿・大野、斐川地区などで操業頻度が高く、来待、浜佐蛇地区などの北岸域では少なかった。しかし、12月27日以降は松江地区での操業頻度が大きく減少し、平田、斐川、宍道地区の非常に狭い範囲に集中して漁場が形成されていた。これは、宍道湖漁業協同組合が保護区を開放したため、保護区での集中的な操業が行われたためと考えられた。

4. 研究成果

調査で得られた結果は、内水面漁業関係者等に報告するとともに宍道湖・中海水産資源維持再生構想の資料に使用された。

5. 文献

- 1) 中村幹雄 他. 島根県内水面水産試験場事業報告(平成11年度)1999; 60 - 63.